

## 「音楽教育の実践」

佐藤 重夫

音楽分科会の参加者は、司会猶原あけみ、運営担当木村和平共同研究野村公・佐藤重夫、実践報告七名、一般参加六名での合計十六名。レポートは、標茶久著呂保育所千葉みよ、標茶たんぼぼ保育園細川美子、大空町女満別小猶原あけみ、猿払浜猿払小石川沢美、乙部町小浅間こずえ、標茶磯分内中講師石窪満、函館盲学校水島真澄の各氏があり、また、昨年に引き続き、札幌陵北中笹木陽一氏からの口頭発表もあり、活発な論議が展開され、深められた。以下、順次その主要点を紹介する。

## 一 「一人ひとりの心に向き合う」

標茶町久著呂保育所 千葉 みよ

年長組三人でのスタート、八月九日に二歳の男の子二人が入所、五人の子どもたちとの実践報告です。

〈リズムだいすき〉太鼓やピアノの音が聞えると、ホールに姿をみせ、小さな体いっぱい楽しさを表現してくれ

る八月生まれのSくん、入所したころは歩行も不安定でしたが、今は走ることが大好き！…自分の足で自由に走れることの喜びを感じているのでしょう。九月生まれのSくんは、ピアノのところにやってきて、嬉しそうな顔をしながら、もみじのようなかわいい手で鍵盤に触り…連弾ごっこ。リズムのオリジナルバージョンがお気に入り。曲の速さや音の高さを変えて、ゆっくり歩いたり、特急列車気分ですつたり、後にもどつたりしながら、次はどんな音だろう、と期待しながら楽しんでる。

〈わらべうたのあそび〉「あぶくたつた、にえたつた、にえたかどうだか、たべてみよう、ムシャムシャ…」の歌にあわせて二歳のお二人も一緒に手をつないで、オニのまわりをぐるぐるとまわっています。年長さんはママ(オニ)役が魅力のようです。好きなあそびを、それぞれが楽しむ姿があり、年長二人と保育者であそびを始めていたときは、なかなかあそびが広がらずに終わってしまうことが多かった。自分の思っていることを発言し、みんなで話し合えることができる場面に、成長を感じ嬉しい気持ちになりました。

〈小学生と一緒にうたう〉保育所と小学校は、同じ建物内にあり、ドアをあけると自由に出入りができます。小学校の教室から、すてきな歌声が聞えてくると、「あつこの

うたしつてる」と言いながら口ずさんいた年長さんです。九月に小学校からおさそいしていただき、「夏の樹」「風が光る」の二曲を一緒に歌いました。小学生七人のはじけるような元氣いっばいの歌声に憧れを感じながら、保育所の子どもたちも歌声をひびかせていました。

少人数ですぐす日々、ほのぼのと……ほんわかさを感じながらも、あそびの充実や展開の難しさを痛感しています。小学生と歌える貴重な体験に感謝しながら、これからも一人ひとりと、たつぷりと向き合いながら、楽しくすごしていきたいと思います。

(少人数での実践からは、多くの教訓を得ること大である)

## 二 「表現する喜び子供たちと共に」

標茶町たんぼぼ保育園 細川 美子

保育園改修工事、七月下旬から地区公民館を借りての保育、不都合を感じるのは大人の側だけ、子どもたちは変化を楽しみ自分たちの遊びや生活を柔軟に対応させており、地域の方との交流や、広いホールの開放感を楽しみながら、もう二ヶ月。

四歳から五歳の子どもたち十一人の保育実践です。

・夏はプール、ひたすらプール。

子どもにとつて、水は必要不可欠な教材であり、形を自

由に変える不思議さと、底知れぬ怖さを持っています。

真上から降りかかるシャワー、不意に襲い掛かる水しぶき、視界で確認できない水面の恐怖、波にゆられる不安定さなど、水を楽しむまではいくつもの難関が待ち受けています。

小さな一步を十一人みんなで喜び合い、記念日を増やしていったこの夏のドラマはいくつもありません。

「だって怖いんだもん」と、最後までもぐることを拒否していたRちゃん。でも、やってみたい、やりたい……。今の自分より、もっと素敵な自分になりたいんだ！という思いが、キラキラと光り輝く水中の美しさを目に焼きつけることができた要因だったのでしょうか。「先生、今日何日？」

「ああ、八月二六日Rがもぐれた日！」とつぶやいたそのひとことに、胸が熱くなりました。小さな胸の中で暖められていた、潜りたい、という要求を今達成でき、こんなに素敵な言葉で表現できる子どもたちの感性に心を打たれます。

・九月、秋の風を感じながら、今は虫捕りに夢中です。上空の雲の動きや形の変化に、子どもたちのイメージはどんどんふくらんでいき、お友達の一言に刺激をもらいながら、Sちゃんも「○○だあ！」と、言葉を発していきます……。

散歩のとき、低空を飛ぶツバメを見た数日後、リズムで

もツバメをやつてみた。勢いよくスピードにのり、方向転換をくりかえしながら、広いホールを走りまわった後、「ひと休みしようか」と座ると、どの子もハアハアと大きく息をしていた。

(ツバメの羽の強さについての対話が広がります。)

高い空をゆつくりと円を描きながら飛ぶとんびにも、子どもたちは目を輝かせます。(そばで飛ぶカラスと比較する) リズムでは、とんびの強さを表現したくつて、夢中で飛びまわっている。リズムは子どもにとつて、何よりも楽しい遊びのひとつのようです。(どんぐり、ちようちよう、かえるなど、散歩の途中で見るものは、何でもリズムの表現で生きます。)

・一〇月、改修工事終了、新しい保育園の生活が始まる。

さつそく引越し初日からホールでリズムを楽しむ、ほんの数カ月の間なのに、子どもたちのスキップやギャロップ、ツイステップの軽やかなこと！狭いホールではあるが、壁スレスレ円を描いて回っている子もいる。R君は現在一歳半です。でもスキップが大のお気に入り、おしりが上下にゆれ、片足だけがステップをきぎみます。同じく未満児のDちゃん、気ままな自由人、担任がお願いするけど、ただ寝ころがっているだけ、なのに、トトとピアノを弾いている私のところに来て、「ザリガニ」と、要求してくれる。(子

どもからの発信で、成長する保育者の毎日の実践の姿が、すぐく理解できる報告です。)

### 三、「あおぞらの音楽」(特別支援学級の実践)

大空町女満別小学校 猶原あけみ

・本校に転勤して四年目を迎えた。転勤とともに特別支援学級の自閉症の子を担当した。初めてのことはかりで、自閉症のことも何もわからず、無我夢中で勉強しながらの担任だったので、この春の卒業するまでの三年間は、本当にあつという間だった。

今年度は、肢体不自由児学級の担任をしながら、コーデイナーの仕事もしているので、全校を見渡しながらの仕事になった。ミクロな仕事から突然マクロ的な仕事になり、始めのうちは、かなりとまどい、これでいいのかと自分に問いながら半年が過ぎた。やっていて思うことは、特別支援はその子の応援団になるってことかな？ということだ。子どもはみんながんばっている。でも、がんばってもできない、わからないことが沢山ある…。そういう子の困ってこながらがった糸を切らないように、ほどこいてあげるような仕事だなあ、と思っている。絡みすぎて時々ほどこくこと、ほどこく手伝いをしていううちに、一緒にほどこくことが楽しくなり、「何だーこんなところであつまずい

ていたのか！」と気づく。抽象的だけど、自分の中では、こんなイメージを持っている。

### 〈リズムにとりくんで〉

転勤二年目に入り、体育の授業でリズム運動から始めた。(音楽に合わせて運動するリトミックのようなもの)

本場に少しずつで、亀のような歩みだったが、子どもたちの可能性が見えてきた。私の持っていたAくんも、リズムが好きになってくれたようで、リズムを楽しんでいた。

昨年の秋には、公開授業を行い、リズムの創始者の一人である丸山亜季先生に来ていただき、リズムと歌の授業を網走の特別支援学級の先生方に見てもらうことができた。

子どもたちは、大勢の先生方の前だったが、一人ずつ曲を選んで、一人で歌うことができた。それは、授業をやっている私自身も驚いたことだった。子どもたちの力に改めて気づかされたというか、こういう機会や場面が子どもたちを、その場で育てているという実感をもった。

リズムも、群馬県から丸山亜季さんについてきた保育士の先生方がリードしてくれ、色々な心地よいリズムに取り組むことができた。あおぞら学級の担任のうち、二人は若い男性教諭だったので、若々しい躍動感あふれるリズムをしてくれて、注目をあびていた。それが子どももの憧れになってくれたと思う。

リズムは、あおぞらの体育として、他の運動と組み合わせながら、定番の授業となっていた。

### 〈歌にも挑戦〉

この授業ははずみとなり、音楽も新しい曲に取り組み勇氣が出てきた。「あおぞらみんなで音楽をやりたい」という気持ちに私自身が変わっていった。子どもたちが、お気に入りの曲をもっているというのも、自信になった。Bくんは、こだわりに強い、変更し弱い子で、人前で話すのが苦手、歌の声もきいたことがない、進級して担任が変わり、こだわりを認め、いつでも同じ曲を選ぶことを認めたら、あるとき突然「かわい、かくれんぼ」という歌を、声を出して歌ったのだ。そうしているうちに、音楽の時間でも、「たんぼ ほんぼ ひらいた」という曲が大好きになってくれて、その歌を小さい声だが歌えるようになった。

一人で「たんぼ ほんぼ ひらいた」を歌うことを選んでくれた時は、感動だった。こだわりは、安心料、ということに気づいた。

・今年度、あおぞら学級は三人の学級になった。進級したのでリコーダーにも取り組むことにした。：ワンフレーズでも吹けるようになったら、という担任団の熱い思いがあったから、しかし、リコーダーは、穴をしっかりとふさがないと音が出なかつたり、息の強さで音が変わったり、かなり

ハードルの高い楽器なのだが、スモールステップで全員がクリアできる課題を与えながら取り組んでいる。シトラだけの曲を全員でできるように、一人でもみんなの前で吹いてくれるようになった。

・歌の方も少しずつ、レパートリーを増やしてきている。

B君は六年生になり、変声期も何とな落ち着いて、大人の男の声に変わった。「いるか」という谷川俊太郎の有名な詩に林光が曲をつけたものがある。「いるか いるか いるか いるか」という言葉あそびのようで面白い。テンポをおそくして取り組んでみた。B君のツポにはまったよう、みんなの前で歌ってくれたのだ。それも二・三回しか歌っていないのに、一人で歌ってくれたのだ。まさに、絡まった糸がほどけた時間だった。

(どんな子でも、その子に合ったでだてで接すれば、少しずつであるが成長し、発展することを実証している実践です)

#### 四 「全校音楽の実践と課題」

猿払村浜猿払小学校 石川 沢美

私が五年前から勤務している浜猿払小学校は、海のそばにあり、今年度は全校十一名、三学級の学校です。親は学校の活動に協力的ですが、教職員同士が協力できない状況

があり、一昨年、昨年は親との関係がうまくいかなかったり、児童の学校での様子が落ち着かない状況でした。今年はやや、児童も、五・六年生がリーダーシップをとって様々な行事に対して協力して一生懸命取り組むことができるようになり、学校研究では算数教科を切り口に児童が自らを考えて、課題を解決して行く実感の持てる授業づくりができるようになってきたり、学び方を身につけて、自分で取り組むことができるようになってきた。

#### 〈全校音楽へのとまどい〉

私は本校に来て、はじめて全校音楽を担当することになり、学年毎の音楽しか教えたことがないので、一年から六年までまとめたの音楽の授業を、どうつくっていくのか、全くわかりませんでした。とりあえず、三年や四年の教材を使いながら、年間授業を行いました、次のような悩みが生まれました。

- ①・その学年で身につけるべき指導事項が、系統的に指導不可。
- ②・一年から六年まで一緒に歌える歌を見つけるのが大変。人数が少ない分、鍵盤ハーモニカやリコーダーの導入などは丁寧に指導できるため、一定のレベルは保つてこれた。

③・一年生の鍵盤ハーモニカや、三年生のリコーダーの導

入などは十分にできない。

④・六年間の中で、共通教材は扱わなくてはいけないが、六年間で落とさないようには、教えられていない。

（これまで工夫してきたこと）

①・発達段階に合った内容での学習ができるように、全校音楽で学習すること、学級音楽で学習することを整理し、単元配列表を整理した。

②・一時間の中でも、前半を全校で行い、後半を低学年と高学年に分かれて学習するようにした。

③・声を出す事に抵抗をなくし、少しでも音域を広げられるように、導入にわらべうた遊びを取り入れた。遊びの中ではみんなと声を合わせて歌ったり、二人で歌ったりすることができるようになった。

④・リズム感が十分でないので、音楽に合わせて、体を動かす遊びを色々行なった。「ぞうさん」手あわせして歌う。「一羽のからす」なわとび、歌に合わせてパンフーダンスなど。

⑤・歌ではなかなかみんなの声が合わないのので、器楽やリコーダーなど楽器などでの合奏を多くし、音楽の楽しさを感じられるようにした。

・学芸会の器楽では、「匠」（劇的ピアノアフターの曲）に取り組み、人員が少ないので、先生・用務員・養護の

先生の力も借りて、みんなで曲を完成させることができた。

⑥・楽譜の読み方も身につけさせたいと考え、音譜カルタをしたり、グループでリズムづくりをして、楽器で打つなどした。（教科書の枠にとらわれている年間配列表でしたが、実践はその枠からとび出して、子どもたちにもそったものになっている。工夫することは、子どもの側に立つての実践になって行くことが、如実に出されている報告である。全校音楽・全学年一緒の音楽の授業づくりは、ほんとうに大変な課題である。多くの若い先生が、とりくんでいることに、敬服する。）

「箏の取り組み」乙部中学校の浅間こずえ氏の実践は詳細な紹介は省略するが、箏の演奏技法を知るための、すぐれた実践である。数字譜を使っていること（1はド・2はレ・3はミ・4はファ・5はソ・6はラ・7はシ・8はド）なども新鮮。

・箏の特徴的な奏法のまとめも、貴重な参考になるもの。

今回は、保育園の実践が紹介できたこと、特別支援学級の実践が大変なこと、しかし、工夫によって、子どもへの愛情によって、その成長に大きく音楽が役立つこと、また、

児童生徒数のきわめて少ない学校での、厳しい実践の状況を紹介できたことは、大変良かったと考えている。

・現場は、授業時数の少ない中で、ほんとうに悪戦苦闘しているが、多人数、多学級の実践は、また別な問題点を多く抱えていると考える。こと音楽にかぎらず、日本の教育全体をどう変えて行くかは、大きく考えれば、政治そのものを変えて行く課題とも直結する。まだまだつづく、厳しい実践と研究課題の道程である。

(北海道音楽教育の会)